（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	澤西　祐典
論文題目	芥川龍之介における海外文学受容について ――旧蔵書を通して見える風景――		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、近代日本の作家、芥川龍之介の旧蔵洋書(日本近代文学館芥川龍之介文庫蔵)の調査を通じて、海外文学がいかに受容されたか、内容・文体の両面から明らかにしたものである。

第1章では、芥川が東京帝国大学英文科の卒業論文で取り上げたウィリアム・モリスの受容が追究される。当該論文が関東大震災により焼失したことから、その内容はこれまで、「Young Morris」という題目から推測するしかなかった。しかし、関係する旧蔵書の書き込みや線引き、アンカット本などの調査により、主として依拠した文献が J. W. Mackail の *The Life of William Morris* Vols. I-II であり、特に、モリス20歳前後の1853年までを扱ったI の40ページまでであると明らかにされる。加えて、芥川が好んだのは社会主義思想家モリスではなく詩人モリスであり、読破したのは、詩集では*The Earthly Paradise* (1868－70)までで、それも網羅的に読んでいなかったこと、その詩の鮮烈な色使いを好んだであろうことが示される。ロマン主義の本質をmysteryとし、中世をよい意味でbarbaric ageとする認識をモリスと共有した芥川は、「きりしとほろ上人伝」「じゆりあの・吉助」「義仲論」「今昔物語鑑賞」にそうした認識を投影し、さらにモリスの失恋や放浪者への憧憬にも共鳴したのではないかと推測、資質に於ける二人の共通性が明示される。

第2章ではバーナード・ショーの受容が解明される。芥川によるショーへの言及数はイプセンやツルゲーネフ、アナトール・フランス、オスカー・ワイルドらと同水準であり、旧蔵書数も29点でフランスについで多いが、これまで詳細な研究に乏しかった。芥川による33の言及例や12点の旧蔵書への書き込みから、大学時代に芽生えたショーへの関心が1920年以降急速に深まることが跡付けられ、初期未定稿「SPHINX (a farce)」がショーの *Cæsar and Cleopatra* に、「あらゆる文芸はジヤアナリズムである」（「「菊池寛全集」の序」）が*The Sanity of Art* の“Preface”に、また、「西方の人」でキリストを「共産主義者」とする点が *Androcles and the Lion* にそれぞれ依拠していることが論証される。さらに、大正後期から晩年の言及中、従来未詳であった参照元の作品 7 点が新たに確定される。一方、社会改良を目指したショーと、あくまで芸術家個人を中心とする芥川の差異が、著作権への関心に触れて示され、ショーに啓発されつつも立ち位置を異にしたことが論じられる。

第3章では、旧蔵書をめぐる多彩な交友関係が追跡される。まず、倉田百三『出家とその弟子』の郵送を依頼する書簡下書きが挟まれていた Edward Carpenter, *Angels' Wings* が紹介され、第四次『新思潮』同人の倉田観が確認される。次に、海軍機関学校時代の同僚E. S. スティーブンソンの献辞付 Conan Doyle, *Adventure of Gerard* や、府立三中時

代の恩師、広瀬雄の献辞付 John Ruskin, *Sesame and Lilies*、府立三中時代の後輩、原善一郎の献辞付 Henry R. Poore, *The New Tendency in Art* などを通じて、彼らとの関係が跡付けられる。さらに、モーパッサンの英訳本シリーズの読了日付がスタンプ印であることから、従来指摘されるような芥川の読了日とは考えられないこと、アンカット本でカットされたページから芥川の読書傾向が推測されることなどが指摘される。

第4章では、芥川編による旧制高等学校学生用英語副読本 *The Modern Series of English Literature* が分析される。このシリーズでは、学生の嗜好に合うよう同時代の作品を多く収録したこと、自身の好みを投影して幽霊譚や怪異小説の採録が多いことなどが、第7、8巻を例に論証される。さらに、両巻の収録作品が*The Best Ghost Stories* (1919)など4冊から採録されたことが解明される。また、旧蔵書に含まれない Edward J. O'Brien and John Cournos 編 *The Best Short Stories of 1918*も、このシリーズでの作者紹介や、発行者石川寅吉宛芥川書簡から、種本の一つと推定される。ついで、本シリーズ収録作品の芥川文学への影響として、戦争と幽霊譚が結びついた"Extra Men"と「妙な話」、"The Interval"と「奇怪な再会」、登場人物が真実の暴露に逡巡する"The Elixir of Youth"と「南京の基督」の関係が論じられる。なお、探索していく中で「近頃の幽霊」の知識源が Dortothy Scarborough の *The Supernatural in Modern English Fiction* であることが確定される。

最後の章では、芥川が日頃親炙していた英文が、彼の文体形成にいかに寄与したかが追尋される。芥川の初期翻訳「バルタザアル」(アナトール・フランス)は英訳からの重訳だったが、旧蔵書の原文と対比すると、訳文では三人称代名詞がほとんど使われていない。初期から後期に移るに従って、一部の例外はあるが三人称代名詞の使用頻度が上がること、一般に王朝物には使用されず、切支丹物・江戸物・開化期物以降で使用されること、「妖婆」「魔術」など怪異小説では使用されないことが示される。これは芥川が、理知的客観的な近代語である三人称代名詞を、作品の素材や時代性、性質に応じて使い分けていたためと考察される。次に、翻訳に際して原文の複文を二文に分ける傾向のあること、文末詞に「である」形が多用されることが指摘され、これが前文を修飾する役割のあることが論じられる。さらに、「それは～からである」という表現の多用も、日ごろ英文で"for"を用いた原因理由構文に接することの多かった芥川の癖であろうと推定される。

以上、芥川文学の素材や発想、参照元、文学的嗜好、交友関係、文体形成の一端が解明され、旧蔵書調査の重要性が主張される。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文の成果は、まずもって、日本近代文学館芥川龍之介文庫所蔵の旧蔵洋書638点809冊の悉皆調査を通じ、その海外文学受容の一端を解明した点にある。

芥川龍之介は、その和漢洋に亘る知見を膨大な読書によって培った。特に、東京帝国大学英文科卒業後、海軍機関学校で英語教官を務めた経歴から、英米文学をはじめとする海外文学受容の解明は、芥川文学の形成過程を知るうえで必須のテーマであった。しかしこれまで、日本文学研究者の間では主として翻訳を介してしか研究が進められて来なかったきらいがある。申請者はその優れた語学力を生かして芥川の旧蔵書を読破し、従来不明だった参照元や素材を確定すると共に、その文学的嗜好、交友関係、文体形成の一端を明らかにした。得られた成果はいずれも一次資料に基づき、芥川の書き込み・線引き・ページカットなどを調査した実証的なもので、高い説得性を示す。

第1章では、ウィリアム・モリス関係の旧蔵書を精査することで、芥川の卒業論文がJ. W. Mackail の *The Life of William Morris* Vols. I-II のVol. I, p 40までを主として書かれたと推定する。従来不明だった卒論の内容を明確にしたもので、優れた業績といえる。また、旧蔵書アンカット本の書き込み・線引きから芥川の読んだ詩を推測し、芥川の好んだのが詩人としてのモリスであったとした上で、二人の文学的感性の共通性を指摘した点は、芥川がなぜモリスを卒論に選んだか、という疑問への的確な解答と評価される。

この研究方法は第2章でも受け継がれる。取り上げられるバーナード・ショーは、芥川の言及数（33）や所蔵本の点数（29点）の割に研究が遅れており、その受容解明が俟たれていた。ここでも申請者は、旧蔵書への書き込みや読了日の検討などによって、これまで不明だった参照元７点を突き止めた。加えて、*The Sanity of Art* の “Preface”や、*Androcles and the Lion*から、芥川のジャーナリズム観、キリスト観の形成を明らかにした。特筆すべき成果といえよう。

芥川編による英語副読本*The Modern Series of English Literature*を扱った第4章でも、当該シリーズの性格を分析し、収録作品の出典を旧蔵書中に見出したことは優れた成果である。さらに、「近頃の幽霊」が Dortothy Scarborough の *The Supernatural in Modern English Fiction*に拠るとの指摘に疑問の余地はなく、また“Extra Men”と「妙な話」、“The Interval”と「奇怪な再会」、“The Elixir of Youth”と「南京の基督」の影響関係の指摘も一定の説得性を持っている。

以上、旧蔵書の内容面が追究されたのに対し、第3章では、書簡下書きが挟まれていたり、芥川宛献辞付贈呈本が入っていたりと、いわば流通する「モノ」としての旧蔵書に光が当てられ、濃密な交友関係が示される。一方、モーパッサンの英訳本シリーズの読了日がスタンプ印であることから、これを芥川以外の旧蔵だったとする指摘は鋭く、流通する旧蔵書の問題点をあぶり出している。アンカット本のカットされたページから既読・未読を判定することで、芥川の好みが推測できるとの指摘も重要で

ある。

第5章は、芥川の文体に対する英文の影響を、旧蔵書の英訳版「バルタザアル」（アナトール・フランス）と芥川の訳文との対照によって明示しているが、これは斬新な着眼点といえよう。例えば、英文の“for”構文の翻訳によって「それは～からである」との表現が多用されたとする推定は説得的である。また、初期作品や王朝物には近代語である三人称代名詞がほとんど使われていないとの指摘や、原文の複文を二文に分けて後半の文末を「である」とするのは、英文の翻訳から学んだ手法であるとの考察は、日ごろ馴染んできた英文の強い影響を示唆するものであり、評価される。

とはいえ、ここで取り上げられた旧蔵洋書への書き込みは一部に過ぎない。こうした地道な調査はこれからも継続されるべきであろう。ただし、現在未所蔵でありながら芥川が確実に参照した本(第4章の*The Best Short Stories of 1918*)や、逆にかつて他の所蔵だった本(第3章のモーパッサンの英訳本シリーズ)もあり、扱いには注意を要する。また、書き込みの筆跡鑑定はある程度可能としても、線引きを芥川のものとしてよいか、その判別は困難であろう。多くのページがアンカットだった*Love is Enough*(第1章)だが、芥川はこれを詩人モリスの代表作と賞賛しており、単純に未読と判断してよいか、疑問も残る。かつて読んだ本を処分し、新たに買い直した本が残された可能性もあるからである。第5章では、執筆時期や時代背景ごとに三人称代名詞の使用頻度が異なると指摘されるが、同じ王朝物でも「芋粥」「偸盗」などには多数使用されており、さらなる考察が必要であろう。

以上のように課題とすべき点は残されたものの、本論文は極めて多くの新見に富み、芥川研究に大きく寄与したことは疑いない。日本近代文学と英米文学という異なった領域を学際的に結び付ける申請者の研究は、本大学院人間・環境学研究科ならではのものと評されよう。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月16日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降